令和３年(2021 年) ４月 27 日（ 火 ）
公益財団法人広島平和文化センター
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館　副館長：大瀬戸
電話：543－6271
担当：橋本

歌人、正田篠枝の遺影が登録されました

１　正田篠枝の被爆状況

安芸郡江田島村（現 広島県江田島市）出身の歌人、正田篠枝（1910 － 1965）は、爆心地から約 1.7 キロメートルの平野町（現広島市中区）の自宅で被爆しました（被爆時年齢 34 歳）。被爆直後の惨状の中、正田は救急箱を探し出し、傷ついた人たちの手当をしました。その後、船舶エンジンの製造・修理工場を営んでいた父、逸蔵の判断で、平野町の自宅の川岸から船で、家族、親戚、従業員たちを乗せて京橋川を下り、山荘のある宮島口（現 廿日市市、当時の佐伯郡大野村）を目指しました。

途中、船のエンジンが故障し、正田は従業員に背負われ、海岸沿いの井口の救護所へ立ち寄りました。正田はそこで初めて、被爆で割れた自分の肩の手当を受けることができました。

たどり着いた山荘へは、数多くの被災者が広島市内からやって来ました。正田はその人たちを介護する中で、つらくむごい体験を聞き、痛む心で歌に詠み、まず 1946 年、短歌誌『不死鳥（ふしどり）』（ガリ版）に原爆歌 39 首を掲載しました。続く 1947 年には、占領下のプレスコードの中、歌集『さんげ』を出版し、原爆投下の惨状をいち早く文学として発表しています。

正田の代表作のひとつ「太き骨は先生ならむ　そのそばに　小さきあたまの骨　あつまれり」は、平和記念公園（広島市中区）の西南、平和大通りの緑地帯に立つ「原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑」に刻まれています。

晩年は、乳がんの苦痛と闘いながら、広島・長崎で被爆死した人たちの霊を弔うため、「南無阿弥陀仏」の名号 30 万書写に打ち込み、成就した 1965 年に 54 歳の短い生涯を閉じました。

２　遺影の提供者

髙本明佳（さやか）氏　　正田篠枝の孫

３　遺影の提供について

登録された遺影をデータ（ＪＰＥＧ）にて提供できます。

提供者：国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

正田篠枝（1910.12.22 - 1965.6.15）